

## イネ<sup>しま</sup>縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカ<sup>うん</sup>密度抑制のための冬期耕耘の効果

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介し、稲収穫後の刈り株や雑草などで越冬するため、越冬世代虫の密度抑制には耕耘が有効だと考えられる。そこで冬期の耕耘の効果を検証したところ、不耕耘の場合の6分の1まで越冬世代密度を低減することができた。

### 内 容

ヒメトビウンカは稲の重要病害の一つである縞葉枯病を媒介する。縞葉枯病発生地域ではもちろんのこと、本田期間中に本病の発生が確認できなかった地域においても、水稻収穫後の再生稲では発病株を確認できることがある（写真1）。発病が確認された地域で刈り株が残っている圃場においては、できる限り早期に刈り株をすき込み、保毒虫の増加を防止するとともに、越冬世代密度を低減させる必要がある。

耕耘は、越冬世代虫のエサとなる再生稲や圃場内に発生したイネ科雑草を除去し、生息環境を攪乱することができるため、越冬世代虫の密度低減に高い効果が期待できる。

そこで冬期の耕耘の密度低減効果を明らかにするために、当センター内の圃場に1月耕耘区と2月耕耘区、不耕耘区の三つの処理区を設定し、12月から4月までの期間、密度を調査した。調査は毎月1回、各処理区において0.25㎡（50cm×50cm）の調査枠を任意に5か所設定し、吸引採集を実施した。

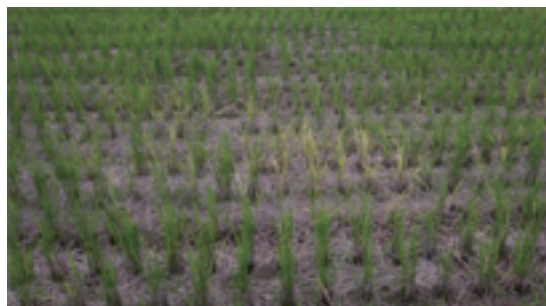


写真1 圃場内で際立つ再生稲の発病株

葉色が黄化しているため、健全な再生稲よりも目立つ。地域や品種によっては再生稲が認められないこともある。

その結果、1月耕耘区では12月時点で44頭/㎡だった密度が、4月には3頭/㎡になった。不耕耘区と比較した場合、越冬世代密度は6分の1まで低減された（図）。

### 普及上の注意事項

県内では4月頃から越冬世代成虫が出現するため、耕耘は4月までに実施することが望ましい。刈り株はヒメトビウンカが隠れるのに最適なおえ、エサとして利用できるため、耕耘は荒起こしではなく、刈り株の原形をとどめないように丁寧に耕耘し、収穫後の刈り株が圃場に残った状態（写真2）にはしない。

吉田 和弘（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

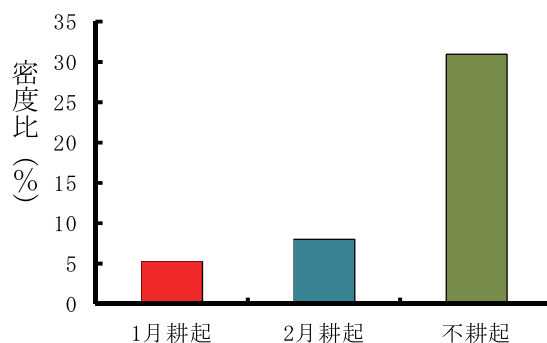


図 耕耘時期別ヒメトビウンカ密度抑制効果  
密度比（3月と4月の平均密度 / 12月の密度）



写真2 収穫後、春先まで不耕耘の圃場

刈り株が残っており、さらに雑草が繁茂しているため、ヒメトビウンカの越冬場所として最適なおえ、成育を助長させる。